

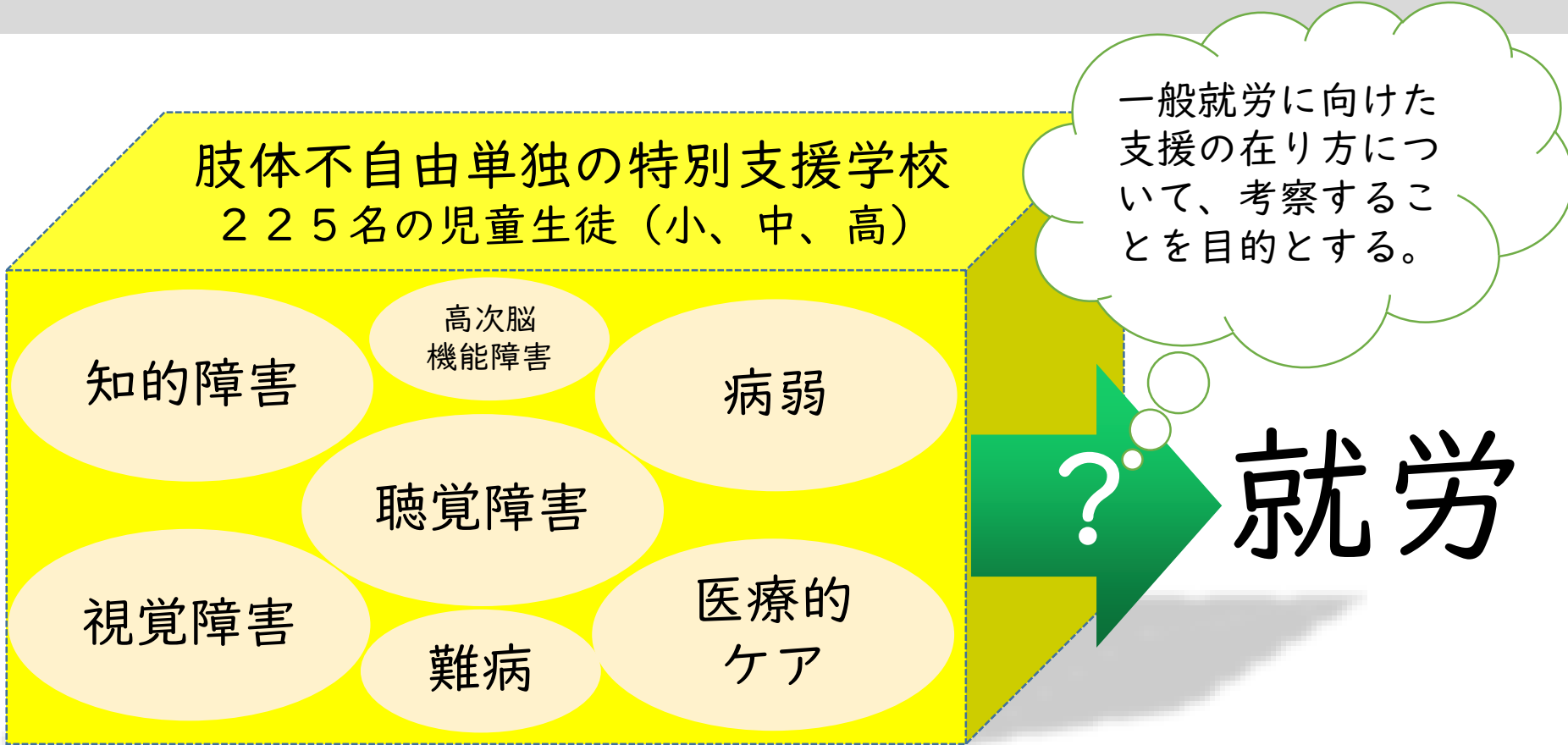
肢体不自由特別支援学校における 一般就労を見据えた支援の在り方に関する一考察

○ 愛甲 悠二（埼玉県立越谷特別支援学校）

Ⅰ キャリア教育について

「キャリア教育」が目指すところは、一人一人の
子供が「自分の役割を果たしながら、自分らしい
生き方を実現すること」

2 背景と目的



肢体不自由特別支援学校でも、自分らしい生き方の一つの選択肢として、一般就労を見据える児童生徒は少なくない。

3 本校における進路指導

就労支援アドバイザーによる児童生徒や教職員向けの研修

埼玉県『自立と社会参加のための就労支援総合推進事業』

個別の事業所説明会

関係機関や企業との情報交換

合同施設説明会

保護者や児童生徒との面談

現場実習

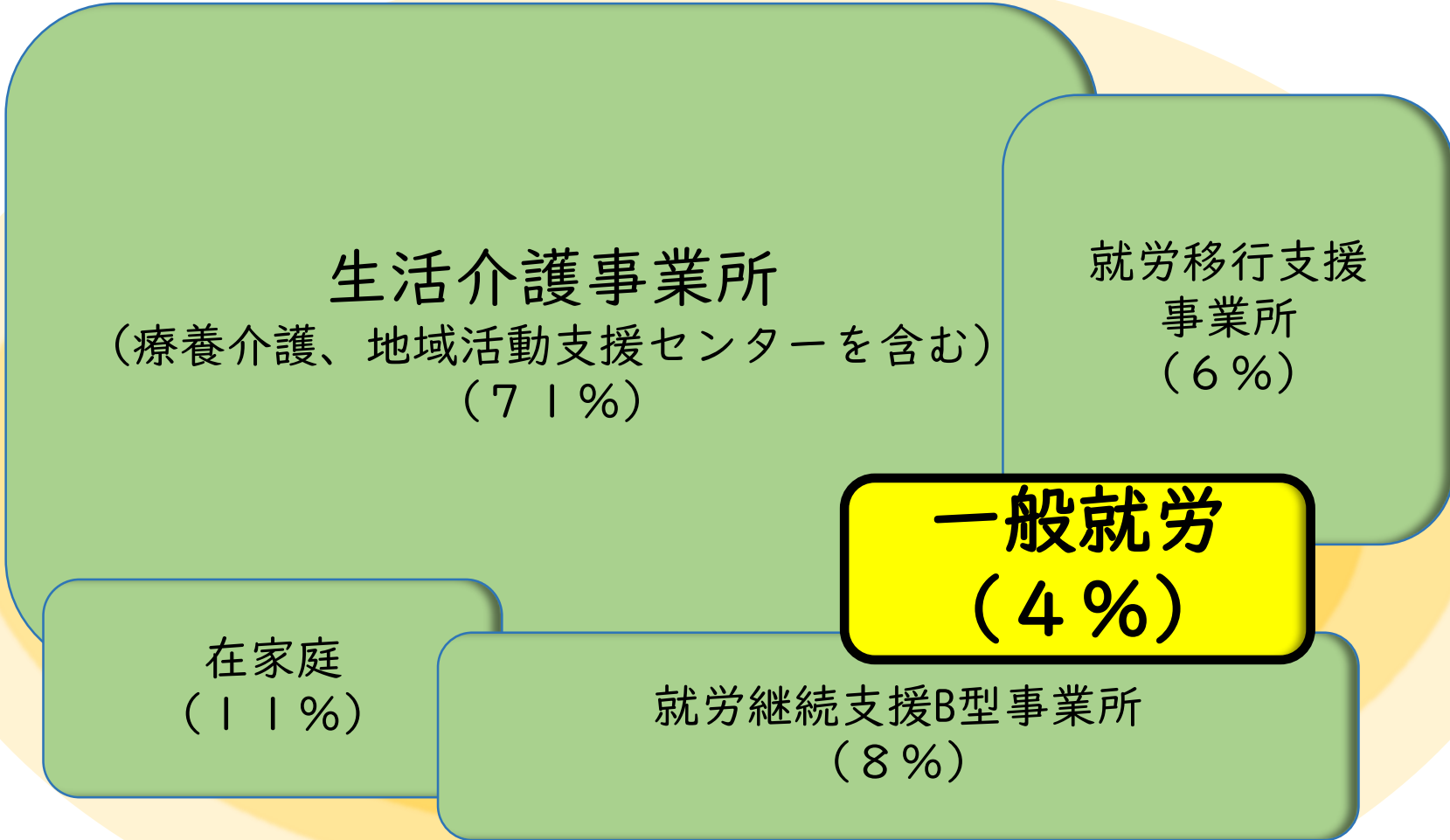
児童生徒一人一人の自分らしい生き方を見据えた切れ目のない教育実践

小学部

中学部

高等部

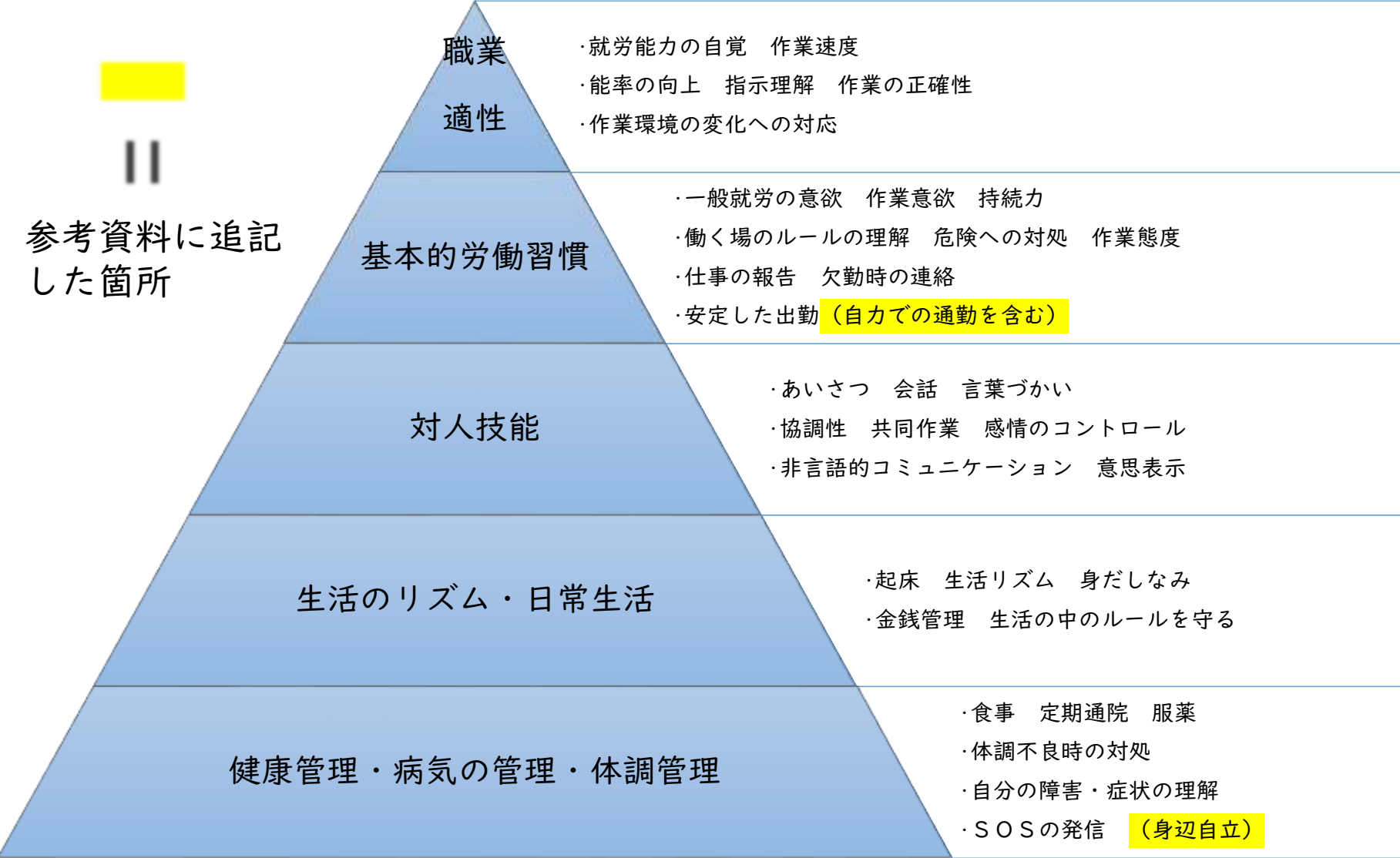
4 本校における進路実績



※上図は、過去5年間の卒業生96名の進路実績に基づいて作成。

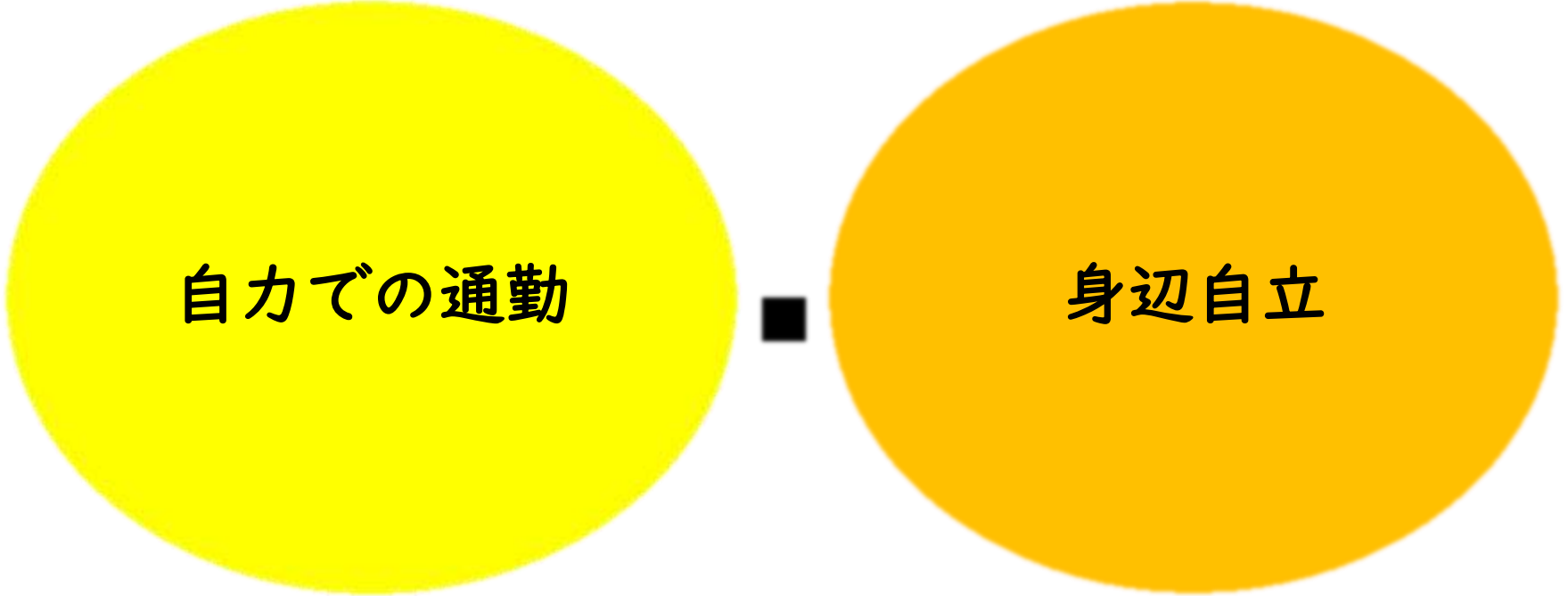
5 安定した就労に向けて必要な要素

参考資料に追記した箇所



※参考：独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構『職業準備性ピラミッド』

6 肢体不自由があるが故に感じる『壁』



自力での通勤

身辺自立

一般就労をする際の基本的な部分ではあるが、肢体不自由特別支援学校の安全安心な環境での学校生活を重ねると、段々と『壁』が高くなっていく感覚がある。本発表において取り上げた事例の生徒は、学校が休みの日に公共交通機関を使って家族と出かける経験を重ねていた。また、身辺処理についても、日頃から「自分で行うこと」を心がけていた。そのような経験がない児童生徒にとって、自力での通勤（通所を含む）、及び身辺自立は大きな『壁』となることが少なくない。

7 児童生徒や保護者が抱える不安について

- 働きたいとは考えているもののどのようにすれば働けるのか、
- 天候を含め、毎日安全に通勤できるのか、
- 施設（トイレを含む）や設備等、肢体不自由に対する理解が職場内でどこまで得られるのか、
- できる仕事に限られることで不利になるのではないかと、等

学校全体での児童生徒一人一人の『自分らしい生き方』を見据えた教育実践



児童生徒一人一人の『自分らしい生き方』に繋げるための関係機関との連携

（ 児童生徒一人一人の可能性の拡がり ）

さらには、一般就労の事例が増えることで、次世代の就労意欲にも繋がり、自然と保護者らが抱える不安の質も変わっていくものと思われる。

8 関係機関と連携した事例について

～コミュニケーション面の課題改善に明らかな効果が見られた事例～



クラスメイトや関わりの多い教員等に対し、時には冗談を言うなど周囲からは社交的と捉えられていた。職業準備性の観点からコミュニケーション面には大きな課題はないと評価されていた。

高等部 2 学年
就労移行+B社（リモート）



高等部 3 学年
B社（リモート+通勤）

職場の人から話し
掛けられた際に黙
り込んだり、

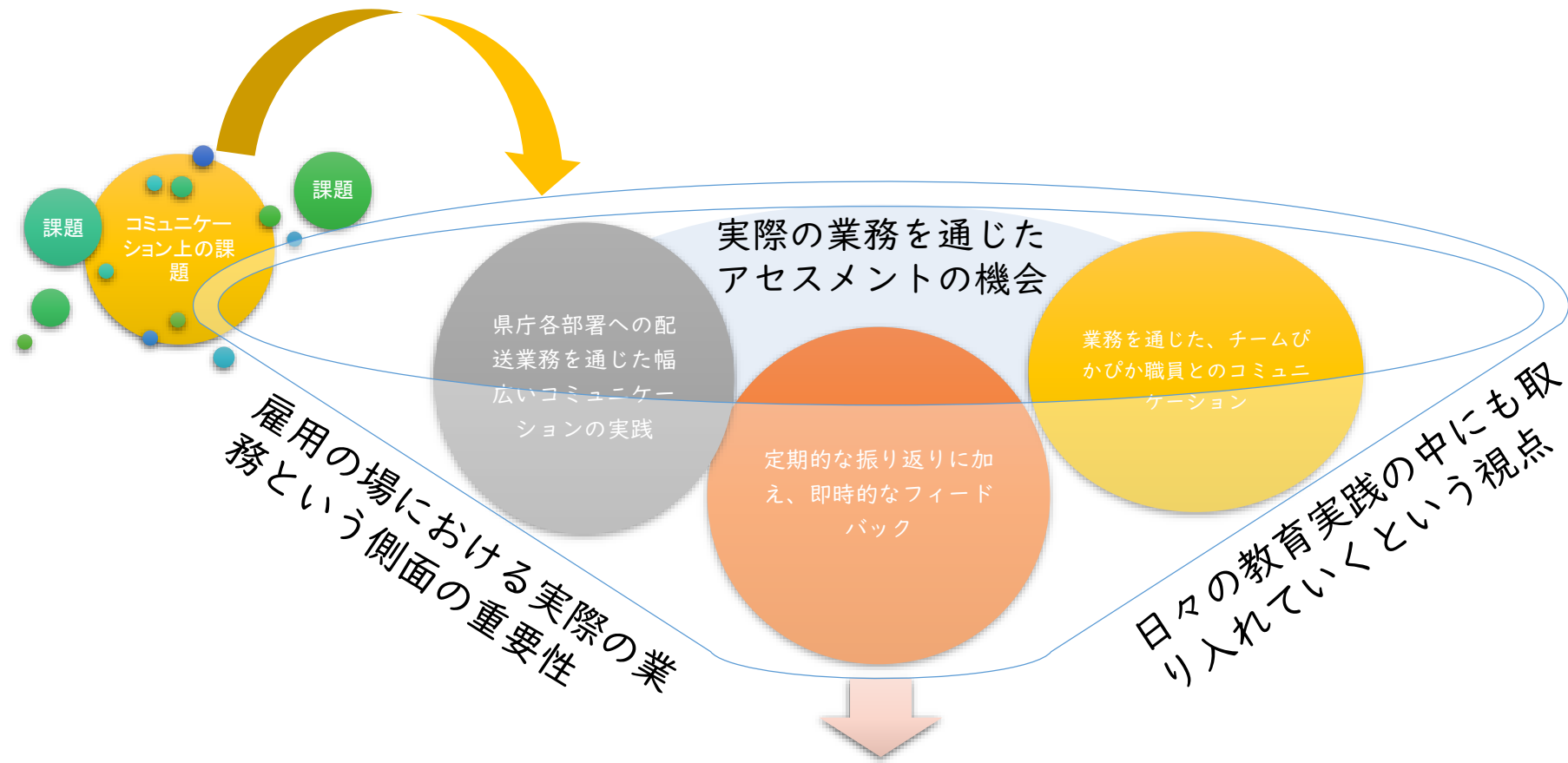
企業側に違和感を与えた

実習最終日の振り返
りの際、口を動かす
様子は見られたもの
の言葉の出ない状況
が続いたりするなど

当初B社は採用を前向きに
考えていたにも関わらず、
結果的には不採用となった。

9 学校の意識の変化

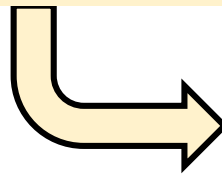
～埼玉県庁を雇用場とする『チームぴかぴか』との職業的アセスメントを目的とした連携～



- 言語的＋非言語的コミュニケーションの習得
- 声の強弱、「あ～」「え～」等、無意識に使っている言葉への意識化
- 職場で必要なコミュニケーションに係る定型文の習得

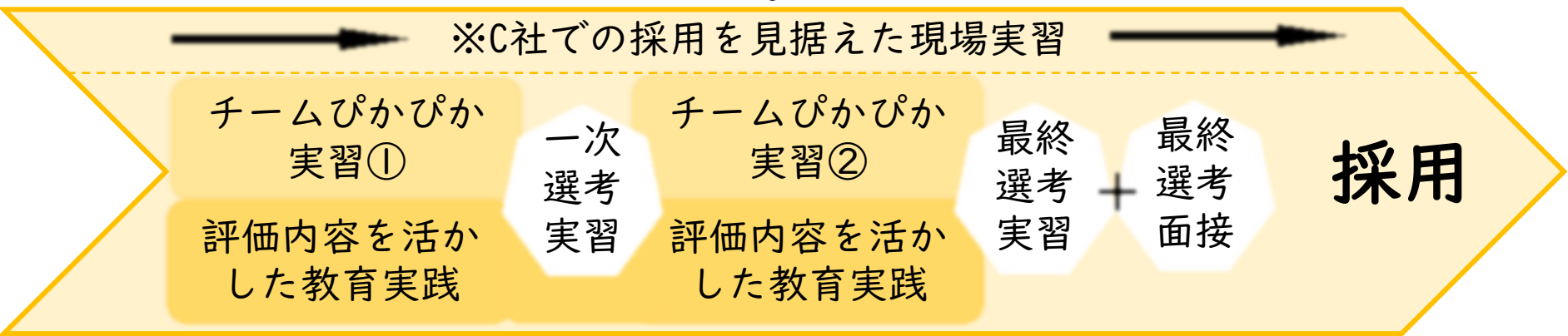
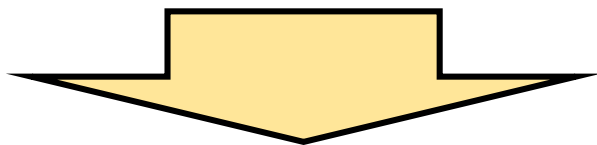
10 学校での取り組みの変化

- 言語的＋非言語的コミュニケーションの習得
- 声の強弱、「あ～」「え～」等、無意識に使っている言葉への意識化
- 職場で必要なコミュニケーションに係る定型文の習得



- 生徒の主体性を尊重した指導
- 定型文の理解に向けた指導
- 普段関わりの少ない教職員との面接練習等

» 学校での取り組み

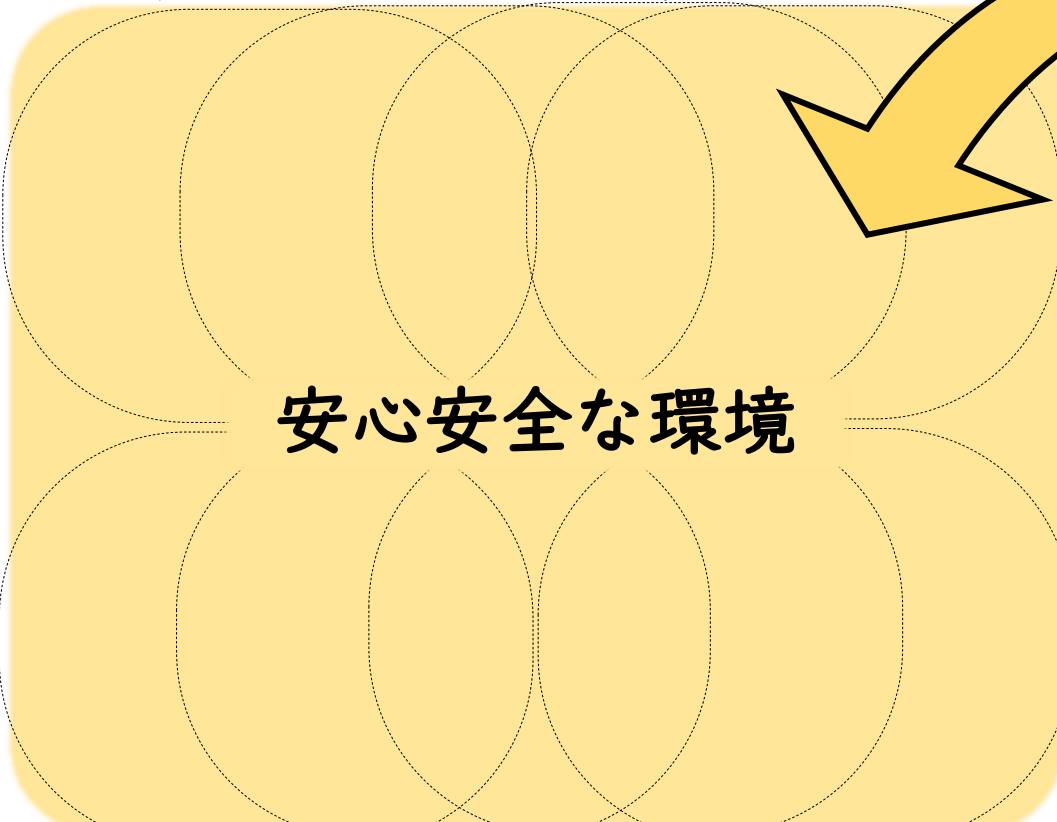


チームぴかぴかとの連携により、学校だけでは難しい『実際の雇用の方での職業的アセスメント』結果を踏まえた教育実践を行うことができた。その結果、一度は自信を失いつつあった生徒Aも、周囲からの支援を受けながら前向きに挑戦していくことができたのだと感じる。

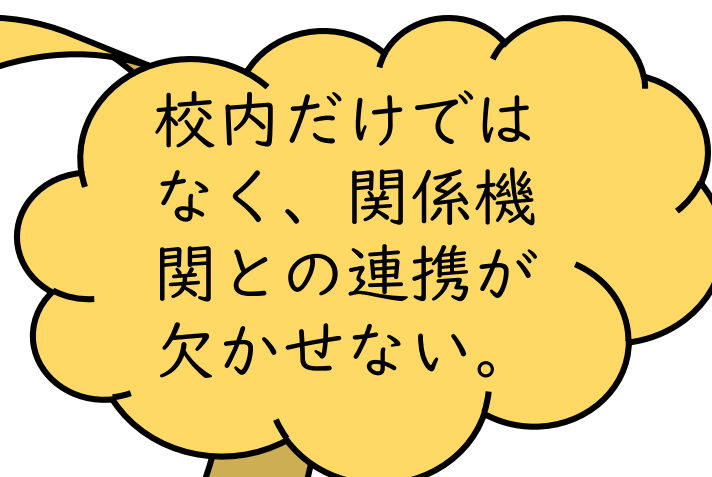
Ⅰ Ⅰ 考察（Ⅰ）

肢体不自由特別支援学校での進路について考える時に大切にしたいこと
～児童生徒が社会において自分らしく生きる力を身に付けさせること～

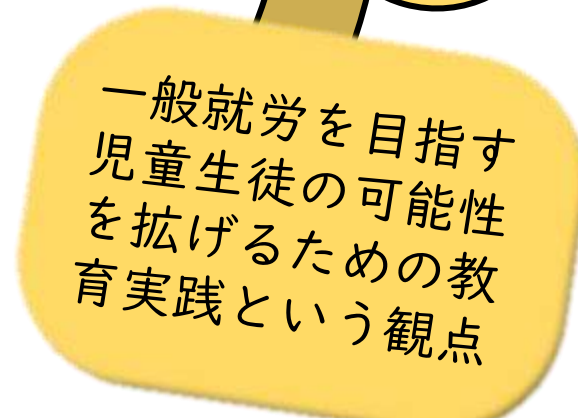
＜肢体不自由校である本校の場合＞



安心安全な環境



校内だけではなく、関係機関との連携が欠かせない。



一般就労を目指す児童生徒の可能性を拓げるための教育実践という観点

Ⅱ 考察（２）

児童生徒一人一人が社会において自分らしく生きる力を身に付けさせるためにも、早期から児童生徒が自らの課題と対峙し、気づき、それを乗り越える経験を重ねる等、社会を見据えた学びが重要である。

小学部 ————— 中学部 ————— 高等部

1 3 考察（3）

≫ 主体性の育ちを阻害しないためにも

- 本人の明確な就労意欲があるか、
- 自己選択・自己決定の過程を踏んできたか、
等も重要であろう。



自分らしい生き方に向けた支援にあたる者としても抑えておかなければならない大切な視点であろう。

Ⅰ 4 最後に

一般就労を目指す場合、学校全体での取り組みに加え、関係機関と連携し、その中で得られた情報を踏まえて、校内での仕組みを整えることで柔軟性のある現実的なキャリア教育を進めることが可能になると考える。周囲からの支援を得ながらも、個々人が自分らしい生き方を形作っていけるようにすることが、進路指導上の大きな目標であると考えている。関係機関や地域にも協力を得ながら、児童生徒一人一人の将来を見据えた取り組みをいかに学校全体の仕組みとして築いていくかが、これからの肢体不自由特別支援学校に課された大切な課題であると感じている。

最後までご覧いただき、ありがとうございました。

肢体不自由のある児童生徒の『自分らしく生きがいを感じられる生活』への一助となれば幸いです。